

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

第 128 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成14年 6 月21日

ク マ タ カ



2001. 2.21 釧路管内音別町 撮影者 中 島 宏 章

〒065-0024 札幌市東区北24条東17丁目

私の探鳥地（43）	円山周辺	武沢 和義	2
鳥好きの文学散歩1	森 鷗外	「雁」	
		高橋 良直	3
コムケ湖のシギ・チドリ		大館 和広	4
檜山北部地域の気になる野生生物と野鳥			
		山下 茂	6
新 会 長 挨拶		小堀 煌治	7
平成14年度総会報告			8
コウライアイサ観察記	付：五稜郭公園紹介		
		鈴木 実	10
探鳥会ほうこく			12
鳥 民 だ よ り			15
探鳥会あんない			16

武 沢 和 義

すぐ目の前の木にとまると、肉眼でもその姿をはっきりと
見ることができる。こんなに美しい鳥であったのかと改めて
感心したこともあった。駐車場を過ぎて少し下ると、左
手に数軒の民家が見える。ここで舗装道路から離れ、向かっ

▲三角山

コースB'

石切場跡

東屋

至 小別沢

大倉山

原っぱ

コースB

民家

荒井山

コースA

旧ユースホステル

総合グランド

神宮

円山公園

至 幌見峠

神社

動物園

コースC

変電所

寺

空き地

▲円山

砂防ダム

裏参道

ジャンプ場前に出ると、右に曲がって舗装道路を下に降りる。この辺り、道路脇の斜面には灌木をつたってキセキレイが移動しているのによく出会う。

て一番右側の民家の横を通って林に入る。しばらく歩くと、目の前がひらけ、かなり大きな原っぱに出る。何時も、ここでビールを飲みながらゆっくりと休憩する。探鳥という観点から言えば、じっくりと定点観察を行う。鳥が移動する通り道になっているらしく、モズ、ツグミ、ヒヨドリ、アカゲラなどが時々通り過ぎる。ここでルリビタキとクロジを見たことがある。更に進むと三角山の石切り場跡の空き地があるが、立入り禁止になっているので、そのまま、真っ直ぐ進む。この辺りメジロが多い。山の手から登ってくる道と交差する所にあずま屋があり、ここから引き返す。これまでをコースBとしておく。

このあずま屋まで来るのに、別のコースを通ることがある。大倉山ジャンプ場の右側を通る遊歩道があり、それを上って展望台に出ると、その上で遊歩道が左右に別れる。右に行くと三角山に行く。このコースも時々使う(コースB')。逆に左に行くと小別沢に出る。いずれも尾根道なので見晴らしの良い場所が所々にあり、オオタカ、ハイタカ、ノスリなどのタカ類が飛ぶと、気持ち良く観察ができる。もう一つよく行く場所をあげると、円山川上流の沢であ

る(コースC)。動物園横の車道を登っていくと(実際に通るのは反対側の円山川沿いの道である)、円山西町に出る。西町神社の所で右に曲がると幌見峠へ出るが、真っ直ぐ進む。少し行くと、左に曲がる細い坂道があり、ここを下って円山川を越えると寺があり、その右側は変電所である。そこを通り過ぎて、真っ直ぐ進むと砂防ダムがある。ダムの両側が歩けるようになっているので、ダムを越えて沢沿いに、三つ目のダムまで歩く。この辺りではキビタキが常に観察でき、エゾハルゼミが鳴くころになっても、キビタキの音が聞こえる。コルリの声を聞くこともある。ここで二度、クマゲラに出会っている。帰りは寺の所を曲がらずに、真っ直ぐ行く。すると右手に大きな空き地がある。以前、ここにはカシラダカが降り、アオバトの声も聞かれたが、今はその面影は残っていない。一番上まで行くと、旭山公園に出る道と藻岩山に続く遊歩道がある。時には、旭山公園を通して帰路につくこともある。

〒064-0804 札幌市中央区南4条西26丁目

鳥好きの文学散歩1

森 鷗外「雁」

高橋良直

鳥の名を題名にした小説は珍しいが、よく知られているのは森 鷗外の「雁」(がん)だろう。といっても「雁」が主人公であるわけではなく、主人公は薄幸の女性お玉であり、お玉と大学生岡田との淡く、不器用な悲恋の物語である。

読み進めていっても何故「雁」なのかは、なかなか分からない。小説の最後に来て、上野不忍池で大学生岡田がいたずらに投げた石が1羽の「雁」に当たって命を奪うというシーンが出てくる。偶然のいたずらが運命を決める……お玉の運命を「雁」のイメージに重ねて題名としたものであろうか。

「雁」は万葉集でも多くの人に詠われているように、古くから日本人に親しまれていた鳥である。中学生の頃だったか、音楽の時間に「雁がわたる／鳴いてわたる／鳴くはなげきかよろこびか」という歌を歌わせられた記憶がある。この部分の歌詞しか覚えていないのだが、もの寂しい感じの旋律だった。なぜかしら「雁」にはもの悲しいイメージが付きまとっているようで、「軽鴨」などではこの小説の題名にはふさわしくないであろう。

小説の中の出来事は明治13年11月のこととなっている。この頃不忍池で「雁」が見られることは珍しくなかったようである。小説が書き始められたのは明治44年であるが、

今日では「雁」に向けて石を投げるなどというシーンを書くこと自体はばかられるのではないと思われる。この当時、野鳥の保護は一般にどのように考えられていたのだろうか。徳川幕府による禁猟政策、鉄砲規制が崩れ、明治の初年には、野生鳥獣の乱獲が激しくなり、銃による事故も頻発したそうである。そのため政府は明治5年、今日の鳥獣保護・狩猟法の前身となる「銃砲取締規制」を發布し、免許制度を導入した。これは文字どおり銃砲の規制を目的としたもので、鳥獣保護という観点はなかったから、大学生の行為はこの「規則」に違反したことにはならないのだろう。

ところで不忍池の不運な「雁」はどうなったかというところ、大学生の酒の肴になるのである。学生らは人目をはばかり、暗くなってから池に入って「雁」を回収し、外套の下に隠しながら交番の前を通過して下宿に持ち帰っている。下宿の婆さんに料理を頼むが、婆さんには「獲ものを分けて遣れば、口を嚙ませることも出来そうである」という記述がある。やはり一種の密漁としての後ろめたさがあったようである。

〒006-0851 札幌市手稲区星置1条6-8-1

コムケ湖のシギ・チドリ

大 館 和 広

はじめに

コムケ湖はオホーツク海岸のほぼ中央、紋別市にある面積約5平方kmの海跡湖である。その名(アイヌ語で曲がった沼)の示す通りに湖岸延長が長く約22kmある。

コムケ湖は3つの水域に分かれていて、一番大きな水域でオホーツク海と人工的につながっており、常時海水の流入がある。潮汐の影響を受けるために湖内には広く干潟が出現する。

コムケ湖の南東にシブノツナイ湖、北西にヤソシ沼があり、コムケ湖の環境を考えた場合にはこれらをひとまとまりとして考えたほうが都合がよい。

1981年から2001年までに256種の鳥類が観察記録されており、このうちシギ・チドリ類は46種で全体の約18%である(『野鳥だより』第127号参照)。

コムケ湖のシギ・チドリはそのほとんどが春と秋に観察される旅鳥である。夏鳥として飛来し繁殖するのはコチドリとオオジシギだけで、イソシギは過去には繁殖していたが、現在は繁殖していない。また、シロチドリは1994年に一度だけ繁殖した記録がある。

秋の渡り

コムケ湖における秋の渡りは、8月中旬から始まり11月上旬まで続く。7月下旬にもトウネンの群れが観察されるが、観察記録が少ないので不明な点が多い。

コムケ湖に飛来するシギ・チドリの観察個体数をグラフ化すると、8月下旬と10月中旬に個体数のピークがある二峰型であり、それぞれトウネン、ハマシギのピークに一致する(図1)。観察される個体数はトウネンで最高約800羽、ハマシギで最高約1,700羽であるが、年によってかなり変動する。

シギ・チドリの出現時期(渡りの時期)は種によりそれぞれであるが、大きく分けると二つの形がある。一つは8月下旬から9月上旬のトウネンのピークの頃に重なるもの、もう一つは10月中旬のハマシギのピークの頃に重なるものである。これをそれぞれ「トウネン型」、「ハマシギ型」ということにする。

「トウネン型」の種には、メダイチドリ、ムナグロ、ヒバリシギ、オバシギ、コオバシギ、タカブシギ、ソリハシシギ、キアシシギ、オグ

ロシギ、チュウシャクシギなどがある。「ハマシギ型」の種には、ダイゼン、オオソリハシシギなどがある。アオアシシギは個体数の出現のピークをはっきりとは示さないで滞在期間が長いと推測される。ホウロクシギはピークが一番早く8月上旬だと思われる。この他の種は観察個体数が少ないので不明な点が多い。

出現種数は8月下旬から9月中旬にかけてピークが来る一峰型である(図2)。

1日の出現種数は最大で23種であり、シーズンの出現総種数は最大35種である。

秋に見られ春に見られていないシギは、ミヤコドリ、アメリカウズラシギ、ヒメウズラシギ、オオハシシギ、コモンシギの5種がいる。

春の渡り

春の渡りは5月の1ヶ月間見られるが、渡りのピークは中旬から下旬にかけての1週間程である。ピークは年によって変動するので、その年のピークを予想するのは難しく、質のよい観察記録を毎年得るのは容易ではない。

図1 コムケ湖のシギ・チドリ
旬間個体数の比較 85-01

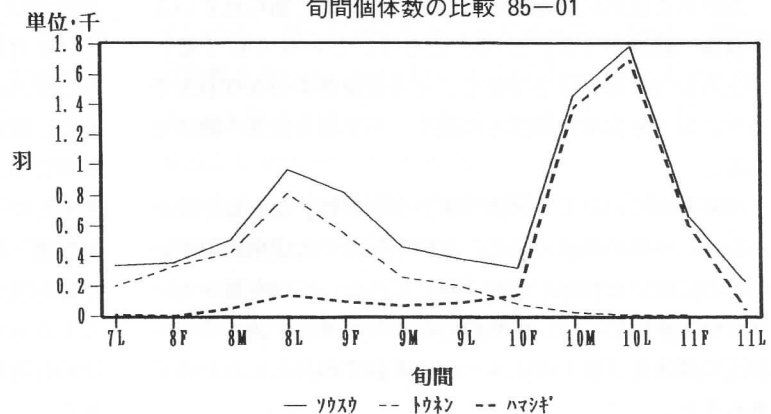
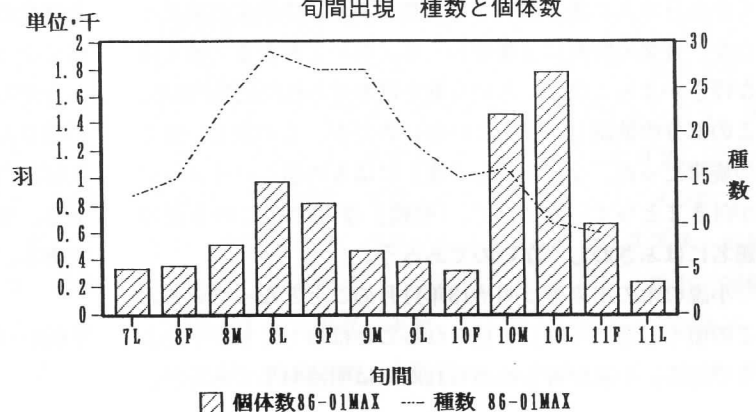


図2 コムケ湖のシギ・チドリ
旬間出現 種数と個体数



春は個体数のピークと種類数のピークがほぼ同時に来る(図3)。春の個体数のピークはトウネンのピークと一致し、最大個体数はトウネンで1,500羽くらいである。ハマシギの個体数は秋に比べて少なく、450羽くらいである。秋と春の個体数の違いが何を意味しているのかは現段階ではわからない。

春は渡りの期間が短いので種ごとの傾向をつかむのは難しいが、ハマシギのピークがトウネンよりもやや早い(2、3日)ように思える。また春は移動のスピードが早く(滞在期間が短い)、渡りが集中するので、トウネン型やハマシギ型といった明確なパターンは見られない。

春に見られ秋に記録のない種はケリの1種だけである。セイタカシギは春に観察記録が集中しているが、他のシギとは観察時期がずれており、別な渡りのパターンを持っているのだろう。また、運がよければ海上を大群(1万羽以上)で移動するアカエリヒレアシシギが見られる。

カラーマーキング調査

1995年から標識調査と並行して青いプラスチックのフラ

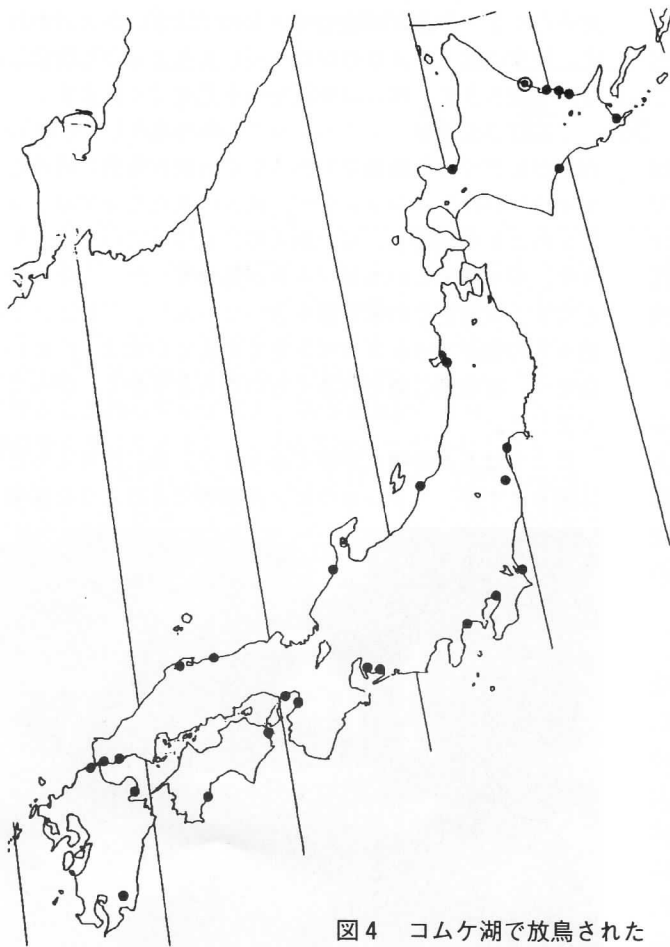
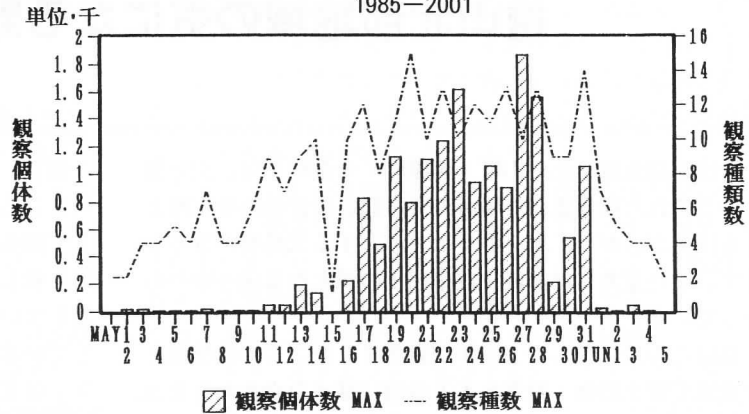


図4 コムケ湖で放鳥されたトウネンの再発見地

図3 春期の観察種数個体数
1985-2001



グを付けて放鳥する調査も始めた。1995年から2001年までに30種2,279羽にフラッグを付けて放鳥した。調査はトウネンのピークである8月下旬から9月中旬にかけて行っている。調査は他の鳥のバンティングと違い、日没から夜中にかけての調査なので体力的にきつい、コムケ湖で放鳥した個体が他の場所から見つかったという連絡が入ると、とても嬉しく励みになる。

1995年から1999年までのトウネンの再発見地を示したものが図4である。これを見るとコムケ湖に飛来したトウネンは日本を縦断して南下していくことがよくわかる。意外だったのは日本海側からの報告だった。特にコムケ湖から石狩海岸へはどこを飛んで行くのだろう。推測ではあるが、渚滑川や湧別川を溯り、石狩川の上流に出て川沿いに日本海を目指すのだろう。以前、浮島峠(渚滑川上流)でキアシシギの交通事故死体を回収したことがあるし、大雪山の沼の原湿原(湧別川上流の延長線上)ではタカブシギを見た。更に雨竜沼湿原ではアカエリヒレアシシギを見ている。これらの疑問の解明にはデーターを蓄積していくことが近道であるので皆様のご協力をお願いしたい。

また、秋にコムケ湖で放鳥したトウネンが、春にもコムケ湖で観察されており、秋と春の渡りのルートが一部では同じことを示唆している。

この調査は今後もしばらくは続ける予定なのでフラッグを付けたシギ・チドリを見た人は、種名、フラッグの色と位置、日時、場所、緯度経度、群れの様子、羽色などを下記の所へ連絡をお願いいたします。

〒270-1145 我孫子市高野山115

山階鳥類研究所 標識研究室

FAX 0471-82-4342 TEL 0471-82-1107

〒094-0015 紋別市花園町3丁目2-4

檜山北部地域の気になる野生動物と野鳥

山下 茂

檜山北部地域(北檜山町・瀬棚町・今金町)は、山と海にかこまれた自然豊かな場所です。北には狩場山を主峰とする山塊が広がり、ブナ林をはじめとする天然林が分布します。また東方には清流・遊楽部川の源となる山々がつらなっています。

私はこの地に住んで、2年が過ぎました。この自然豊かな地域で野生動物・野鳥と人との間に様々なかかわりを見ました。時にはトラブルが発生することもあります。印象ある出来事を紹介したいと思います。

なお、挿入したアカショウビンとヤツガシラの写真は、北檜山町徳島の伊勢勝洋氏が撮影したものです。

ヒグマ

昨年、檜山北部地域でのヒグマ目撃報告数は80件以上、捕獲数(射殺等)は7頭でした。ヒグマが身近に存在する地域です。

私の職場から200m程のところでもヒグマが出ました。あえなく射殺されています。山の生息環境が悪化し、若いヒグマがなわばりを追われ、人里におりてきた結果でしょう。多くのヒグマは人を恐れます。しかしごく少数が攻撃的です。家畜などを狙うヒグマです。この数年で犬、羊、牛が襲われました。玄関前の鎖につながれた犬が食べられ、放牧中のホルスタインが牧柵を越えて連れ去られています。

スイートコーン畑で被害報告があり、彼らの行動跡を観察してみました。初めは申し訳なさそうに畑の端部で食害しています。日がたつにつれ、畑の中央近くまで足をのびします。畑に腰をおろし、手の届く範囲のコーンを10本程むしりとりて食べます。人が食べるようにきれいに実の部分だけ食べます。残った芯は丁寧に1カ所に並べてあります。その後数m移動し同じ動作を繰り返します。

現在、北海道環境科学研究センターでヒグマと共存するための調査がすすめられているようです。人に危害を与えることなく、農業分野などでの被害を最小限にとどめ共存する方法です。早く、人にとってもヒグマにとっても緊張しながらも安心して暮らせる方法が早くとれると良いものです。

ホンドテン

夜、山間部の国道を走行しているとホンドテンをよく見かけます。1年間で10回近く出会いました。ホンドテンは、もともと北海道には生息せず、1940年代に毛皮をとるため飼育されたものが放され、分布を拡大したとされます。大きさはキタキツネよりはやや小型ですが、尾を含めると体長70cmにもなります。黄色味の強い鮮やかなキテン、冬にも黄色化しないスステンの両系統が生息しているようです。こちらを振り向き足早に逃げる様子は、気品に満ちながらもとても愛らしい感じがします。

先日、山間に住むおばあちゃんに会ってきました。「このところテンが増え始め、冬になると納屋に入りいたずらして困るんだ。今冬、追い払うつもりで毒餌を置いたら3頭も殺してしまった。かわいそうなことをした……。」と話していました。また「30年程前には、捕まえて襟巻きにしている人がいたよ。」とも言っていました。その話の「テン」はまぎれもなくホンドテンでした。本来生息しているはずのエゾクロテンは、おばあちゃんの若い頃もほとんど見られなかったようです。

檜山北部地域では、エゾクロテンがホンドテンによって駆逐されてしまったようです。ホンドテンは、本州では森林性の貴重な野生動物です。しかし、北海道にあっては外来性のアライグマやミンク同様の生態的位置づけにあるのかもしれません。人為的に移入され増え続ける動物をどのように考えていけばいいのか悩んでしまいます。

アカショウビン

檜山北部地域を代表する野鳥です。身近に観察できる場所として北檜山町の浮島公園があります。公園内の池にはウグイが多数生息し豊富な餌場となっています。周辺ではおそらく2～3番は繁殖しているのではないかとされます。朝夕には「キョロロロ……」とちよっぴり物寂しげな声を聞きます。時には華麗な姿も見せてくれます。

ここ浮島公園は、ミズバショウの群生地としても知られ、周辺がヒグマの生息地でもありながら農村集落に隣接した少々珍しいロケーションです。地元の人たちはアカショウビンのことを理解し、長い間大切に見守っています。そんな中、少々痛ましいエピソードがありました。一昨年のことです。公園近くの家で話をきいていたら、「実は、この前うちの猫がアカショウビンをくわえていたよ。」という話です。猛禽類に襲われるくらいならともかく、びっくりしました。

ここでは人との接点が多くあります。猫に捕らえられては困りますが、アカショウビンが繁殖できるような環境を



アカショウビン (伊勢勝洋氏撮影)

維持してくれているのは地元の人たちの力です。いつまでも鮮やかなアカショウビンが渡って来てくれるよう願います。

ヤツガシラ

檜山北部地域はヤツガシラの重要ルートかもしれません。昨年3月末に5羽のヤツガシラを確認しました。一地域でほぼ同時期にこれほどの数が記録されるのは珍しいことでしょう。

雪の残る牧草地を貫く農道路肩で餌をついばんでいました。必死で餌探しをしているのか、車で5m近くまで寄っても逃げません。冠羽を立てこちちを向きました。その時さっと10m程移動してしまいました。1週間以上は滞在し



ヤツガシラ (伊勢勝洋氏撮影)

ていたでしょうか。

「鶏冠のついた変わった野鳥を見たことあるよ。」と、ヤツガシラは地元の人たちに、過去何度も確認されています。ユニークな野鳥なので少々興味のある人は忘れないようです。きっと、融雪期に、日本海側沿いに北上する渡りのルートがあるのではないのでしょうか。

ここでも人との接触がありました。飛翔高度が低いせいなのか、交通事故に遭遇してしまったようです。国道に死体がありました。一過性の渡り鳥にとっても人との関係があり、人間社会はやはり手強い環境のようです。

[付1] 檜山北部地域で私の目撃した哺乳動物

ヒグマ、キタキツネ、エゾタヌキ、ホンDOIタチ、ホンドテン、エゾリス、エゾシマリス、エゾユキウサギ、トガリネズミ類

[付2] 檜山北部地域の私の気になる野鳥

オオハム	冬期飛来
ハヤブサ	繁殖
ホトトギス	夏期飛来・繁殖
アカショウビン	夏期飛来・繁殖
ヤツガシラ	平成13年3月に5羽飛来
ヤマゲラ	高い生息密度
クマガラ	山間地域に比較的多く生息
ミヤマガラス	平成13年3月末に約600羽飛来

〒049-4501 瀬棚郡北檜山町北檜山92-23

新 会 長 挨 拶

小 堀 煌 治

4月の総会で会長に選任されました。会設立から6代目の会長になります。歴代の会長は初代の犬飼哲夫会長から錚々たる顔ぶれで、引き受けるに当たっては気が重かったのですが、気が付いてみると会設立からの会員は私を含めて僅かしか残っていません。幹事も長いこと務めてきたし、副会長も長くなりました。「順番が回ってきた」という事でしょう。20代の頃から会員になり、会には随分お世話になりました。昨年、定年になりましたが、同期入社の定年の挨拶はほとんどが仕事の思い出話、私の場合は仕事プラス野鳥が有りましたので、少しは豊かな人生を送れたのではないかと感謝しています。

そんな訳で会に少しでも恩返しできればと思い、引き受けることになりました。何とか無事、次の世代へバトンタッチできればと考えています。幸い前会長の谷口さん、藤巻さんが顧問に就任し、永年、会の運営に尽力いただいた井上さんも副会長を引き受けてくれました。新しい幹事も4人加わり、強力な執行部が誕生しました。小泉内閣はカリスマ総理が引っ張っていますが、野鳥愛護会は「万機公論に決すべし」でいきたいと思います。

愛護会結成の目的を改めて読んでみると、「北海道野鳥愛護会は全道野鳥愛好者の連絡組織として、各種の情報交

換、資料や研究の場を提供し、一面においては、野鳥保護思想を普及するための指導者を養成する。」というものです。当時とは状況も変わりましたが、基本的には現在にも通じる普遍的な目的が盛り込まれています。ここでのキーワードは“全道的”という事ではないのでしょうか、愛護会の会員は札幌だけでなく全道にいます。その事は皆さん充分承知していて、これまでの総会や幹事会で「札幌に偏らず全道会員のための会にするには、どうすればよいか」、このテーマで何回も話合われてきました。しかし、なかなか決定打はありません。なにか良いアイディアはないのでしょうか。これからも皆で知恵を出し合って目標に近づきたいものだと考えています。

最近、外部の人から、「この頃愛護会は元気だね」とお褒めの言葉をいただきます。30周年記念誌の発行、ホームページの開設、一泊探鳥会など、幹事の献身的な努力で新しい試みが生まれ、心配された会員の減少にも歯止めがかかっています。“継続は力なり”で、これまで続けてきた事もしっかりと守り、一方ではこれまでの慣習にとらわれず、規制緩和や変化も必要だと思います。会員の方から沢山の意見を寄せていただければ、会の一層の発展に結びつくと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

平成14年度 総 会 報 告

日 時：平成14年4月13日(土) 午後2時～4時

場 所：札幌市民会館 第1会議室

谷口一芳会長の挨拶のあと、議長に戸津高保氏を選出し、議案審議が行われ、原案どおり可決、承認された。

〈議 事〉

1. 平成13年度事業報告

〔総 務〕

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー

開催期間：平成13年5月8日(火)～5月28日(月)

出 展：12名、23点(内1点は特別展示)

(2) 「野鳥だより」の発送(124号～127号)

(3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催

講 師：大館和広氏「コムケと言えばシギ・チドリ
ー見せます 出します 教えますー」

平成14年1月12日(土)、札幌女性センター

参 加 者：94名

(4) 30周年記念誌の作成・配布

(5) 会員名簿の作成・配布(記念誌と一緒に発送)

(6) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(70部)

(7) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(8) 傷害保険の更新

〔広 報〕

(1) 「野鳥だより」124号～127号の発行

(2) 愛護会ホームページの開設(8月)

〔探 鳥〕

(1) 探鳥会21回。参加者累計797名。(1回平均38名)

(2) 「野幌森林公園を歩きましょう」開催7回。

参加者累計137名(1回平均20名)

〔会 計〕

(1) 平成13年度決算報告

(2) 30周年記念事業特別会計決算報告

(3) 平成13年度会計監査報告。大野信明監事から適正に 処理されている旨の報告があった。

2. 平成14年度事業計画

〔総 務〕

(1) 野鳥写真展の開催

開催場所：カメラの光映堂フォトギャラリー

開催期間：平成14年5月8日(火)～5月20日(月)

(2) 「野鳥だより」の発送(128号～131号)

(3) 新年野鳥講演会、スライド映写会の開催

(平成15年1月予定)

(4) 愛護会名入りカレンダーの作成・販売(70部)

(5) 定例幹事会の開催(各月1回、計12回)

(6) 傷害保険の更新

〔広 報〕

(1) 「野鳥だより」128号～131号の発行

(2) 野鳥愛護会ホームページの随時更新

〔探 鳥〕

(1) 探鳥会21回(コムケ湖一泊探鳥会を含む)

(2) 「野幌森林公園を歩きましょう」7回

〔会 計〕

(1) 平成14年度予算(案)

〔役員人事〕

(1) 谷口一芳氏が会長を退任し、副会長だった小堀煌治氏が新会長に就任した。

(2) 谷口一芳氏と藤巻裕蔵氏が顧問に就任した。

(3) 井上公雄氏が探鳥幹事代表を退任し、副会長に就任した。

(4) 総務幹事だった岡田幹夫氏が探鳥幹事代表に就任した。

(5) 岩崎孝博氏、松原寛直氏が総務幹事に、田子元樹氏、成澤里美氏が探鳥幹事に、北山政人氏が広報幹事に新たに加わった。

〔平成14年度役員〕(敬称略)

顧 問 谷口 一芳、藤巻 裕蔵

会 長 小堀 煌治

副 会 長 戸津 高保、井上 公雄

監 事 大野 信明、村野 紀雄

会計幹事 蒲澤鉄太郎、清水 朋子

代表幹事 白澤 昌彦

幹 事

(総務) ◎中正 憲佑、岩崎 孝博、大町 欽子
蒲澤鉄太郎(兼)、栗林 宏三、佐藤ひろみ(兼)
三船 幸子、村田 静穂、松原 寛直
渡辺紀久雄

(探鳥) ◎岡田 幹夫、井上公雄(兼)、梅木 賢俊
後藤 義民、栗林 宏三(兼)、梶浦 孝純
佐藤 幸典、竹内 強、田子 元樹
戸津 高保(兼)、富川 徹、浪田 良三
成澤 里美、野坂 英三、早坂 泰夫
長谷川富昭、渡辺 俊夫

(広報) ◎樋口 孝城、北山 政人、佐藤ひろみ
白澤 昌彦(兼)、芹澤 裕二、武沢 和義
高橋 良直、道場 優、道川富美子
山下 茂

(◎印各担当の代表者)

会 員 数

項 目	11. 4. 1	12. 4. 1	13. 4. 1	14. 4. 1
個人会員	330名	325名	324名	339名
家族会員	33家族	31家族	42家族	46家族
団体会員	2団体	2団体	2団体	2団体

平成13年度 決 算 書

(収入の部)

項 目	予算額(A)	決算額(B)	増 減 (B-A)	摘 要
繰越金	489,448	489,448	0	
個人会費	640,000	753,000	113,000	新規会員56名の増加
家族会費	126,000	127,000	1,000	
団体会費	10,000	10,000	0	
寄付金	0	6,500	6,500	
参加費	28,000	47,000	19,000	新年講演会 参加者94名
売上金	190,000	198,970	8,970	野鳥だより、 カレンダーほか
雑収入	552	16,945	16,393	一泊探鳥会剰余金 ほか
特別会計から繰入	0	66,559	66,559	30周年記念事業剰余金
合 計	1,484,000	1,715,422	231,422	

(支出の部)

項 目	予算額(A)	決算額(B)	増 減 (B-A)	摘 要
印刷費	600,000	627,410	27,410	写真の増加および 増頁分
通信費	200,000	191,890	△ 8,110	
会議費	33,000	34,200	1,200	
消耗品費	50,000	22,779	△ 27,221	
交通費	15,000	19,500	4,500	
報償費	92,000	92,000	0	
雑費	70,000	67,589	△ 2,411	
30周年記念 事業費	200,000	200,000	0	
予備費	224,000	0	△ 224,000	
次年度へ繰越	0	460,054	460,054	
合 計	1,484,000	1,715,422	231,422	

平成14年度 予 算 書

(収入の部)

項 目	本年度 予算額	前年度 予算額	前年度 増 減	摘 要
繰越金	460,054	489,448	△ 29,394	
個人会費	700,000	640,000	60,000	2,000×350名
家族会員	126,000	126,000	0	3,000×42家族
団体会費	10,000	10,000	0	5,000×2団体
参加費	30,000	28,000	2,000	新年講演会
売上金	130,000	190,000	△ 60,000	野鳥だより、 カレンダーほか
雑収入	3,946	552	3,394	預金利息ほか
合 計	1,460,000	1,484,000	△ 24,000	

(支出の部)

項 目	本年度 予算額	前年度 予算額	前年度 増 減	摘 要
印刷費	650,000	600,000	50,000	野鳥だより4回発行
通信費	200,000	200,000	0	野鳥だより発送費 ほか
会議費	35,000	33,000	2,000	幹事会会議室使用料
消耗品費	50,000	50,000	0	ネームプレート 封筒ほか
交通費	20,000	15,000	5,000	野鳥だより発送事務 の幹事交通費
報償費	92,000	92,000	0	事務所・ 講師謝礼ほか
雑費	70,000	70,000	0	傷害保険料、写真展 ほか
特別会計へ繰入	0	200,000	△ 200,000	
予備費	343,000	224,000	119,000	
合 計	1,460,000	1,484,000	△ 24,000	

30周年記念事業特別会計（平成12、13年度）

(収入の部)

項 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
寄付金 当初予算	500,000	500,000	0	柳澤、森田、野口夫 人から
補助金	400,000	400,000	0	前田一步園から
一般会計 から繰入	200,000	200,000	0	
売上金	380,000	290,400	△ 89,600	
寄付金	0	8,000	8,000	
その他	0	1,316	1,316	預金利息
合 計	1,480,000	1,399,716	△ 80,284	

(支出の部)

項 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
印刷・代 製本	1,000,000	1,000,000	0	
消費税	50,000	50,000	0	
編集費	100,000	94,000	△ 6,000	イラスト代ほか
通信費	150,000	150,160	160	
消耗品費	100,000	22,547	△ 77,453	
雑費	10,000	16,450	6,450	
予備費	70,000	0	△ 70,000	
一般会計へ繰入	0	66,559	66,559	
合 計	1,480,000	1,399,716	△ 80,284	

コウライアイサ観察記

付：五稜郭公園紹介

鈴木 実

はじめに

平成14年(2002年)3月19日、野鳥仲間から五稜郭公園にコウライアイサが来ているとの情報があった。毎朝、運動のため公園に通っているが、公園壕の水が解氷する頃から赤川水源地の探鳥に行っており、公園には行っていなかったため発見が遅れてしまったのだ。

この公園は私の探鳥フィールドにしていなかったので、探鳥記録はほとんど無いが、永年探鳥記録を整理している日本野鳥の会会員の手塚政実氏の資料と合わせて、五稜郭公園の紹介とコウライアイサ観察記録を纏めてみた。

1. 五稜郭の起源と函館駅からの案内

徳川時代末期、幕府は箱館周辺防備の必要を感じ、洋学者武田斐三郎に設計と監督を命じ、1857年に着工し、7年後に完成したものである。

明治元年(1868年)、榎本武揚が旧幕臣を収容し五稜郭を占拠したが翌年敗れ、新政府は箱館を函館と改め、最初の開拓使をここにおいた。

五稜郭の位置は函館駅から東北約4kmにあり、駅からの交通の便が非常に良い。



五稜郭公園略図



コウライアイサ 2002. 3.22 梅田忠平氏撮影

2. 公園の環境その他

五稜郭はその後、アカマツ、サクラなどを植樹整備し、市民の憩いの場として、春は桜の花見、秋は紅葉の鑑賞と親しまれている。公園管理事務所の資料によると、種別はアカマツ(2,040本)、サクラ(1,683本)のほか、カエデ、ツツジ類など、約50種類。植樹本数は4,515本(文化庁アカマツ150本を含む)という。また、壕の散策路は市民の健康保持のため早朝からラジオ体操、外壕ジョギングの場として活用され、東南アジアからの観光客も多く、冬期間でも結構賑わっている。

3. 野鳥観察状況

市街地の中にあるこれだけの環境が良い場所なので、小鳥類の飛来は結構多い。私はほとんど早朝のラジオ体操前後の探鳥記録しか無いが、毎日の記録を取って整理している手塚政実氏の資料を別に載せておく。

4. コウライアイサの発見の経緯

五稜郭公園には朝のラジオ体操にたくさんの方が来ている。後日知人の一人から聞いた話では、コウライアイサを最初に見たのは3月13日頃で、はっきり確認されたのは3月16日のこと。3月19日に野鳥仲間から電話があり、早速仲間4人で確認に向かったところ、公園裏門付近の水辺に一つがいのウミアイサに似た鳥がいた。ウミアイサと違って、冠羽が長く、雄の胸は白かった。脇には黒い横斑(ウロコ模様)があった。雄の頭部は緑黒色で、日の当時は緑が映えてとても綺麗に見えた。雌の頭部は茶褐色で、冠羽は雄より少し短かった。胸から脇にかけて白色で、雄と同じ模様があった。

5. 日常の行動

壕の正門から裏門にかけて遊泳し、時々水中に潜り小魚を捕っていた。非常に警戒心の強い鳥といわれているが、壕の外周を常時人が通行するのに、一向に気にする風はなかった。ただし、壕の内側に人が近づいたり、外側でも大きな声や大きな動作をすると飛び立つことがあった。

6. 感 想

コウライアイサ日本飛来については、Yahoo! オンライン野鳥図鑑フリートーク欄の3月1日付記事に、広島県

某所で撮った写真があった。こうしてみると、毎年日本のどこかに来るものと思われる。この鳥が五稜郭にどのような経緯で来たのか不明であるが、今年は暖冬で壕の水が例年より早く解けたのも原因の一つではないかと思う。

姿が見えなくなったのが22日から23日にかけてなので、壕に滞在していたのは約10日間であった。この間、市民やたくさんの観光客を楽しませてくれたことを喜んでいるとともに、これを契機に毎年飛来してくれることを念じている。

〒041-0853 函館市中道2-5-5

五稜郭公園野鳥観察記録(1999年末現在、手塚政実氏資料)

鳥名	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 カイツブリ											○	○	
2 ダイサギ				○	○								
3 アオサギ			○										
4 オオハクチョウ			○										
5 マガモ			○	○	○					○	○		
6 カルガモ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7 コガモ			○	○									
8 ヒドリガモ			○						○	○	○		
9 オナガガモ										○			
10 ハシビロガモ			○							○			
11 ホシハジロ										○			
12 キンクロハジロ			○						○				
13 スズガモ											○		
14 ホオジロガモ											○		
15 トビ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
16 ハイタカ								○					
17 ノスリ												○	
18 チョウゲンボウ	○				○			○					
19 エゾライチョウ										○			
20 キジ								○		○			
21 ヤマシギ								○					
22 ユリカモメ											○		
23 オオセグロカモメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
24 ウミネコ					○	○	○	○	○	○	○	○	○
25 キジバト			○	○	○	○	○	○	○				
26 カッコウ					○	○							
27 ツツドリ								○					
28 ホトトギス						○							
29 カワセミ					○			○					
30 アカゲラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31 コゲラ	○	○	○	○	○								
32 ツバメ				○									
33 イワツバメ					○	○	○	○					
34 キセキレイ			○	○	○								
35 ハクセキレイ	○		○	○	○			○	○	○	○		
36 ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
37 モズ				○	○	○	○	○	○	○			
38 キレンジャク	○	○			○								
39 ヒレンジャク				○	○								
40 ミソサザイ	○		○	○	○			○	○	○	○		
41 コマドリ				○	○								
42 ノゴマ					○								
鳥名	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
43 ルリビタキ					○	○						○	○
44 ジョウビタキ	○		○									○	○
45 マミジロ					○								
46トラツグミ												○	
47 クロツグミ					○	○							
48 アカハラ					○								
49 シロハラ					○								
50 マミチャジナイ			○									○	○
51 ツグミ	○	○	○	○	○							○	○
52 ヤブサメ												○	
53 ウグイス				○	○	○							
54 コヨシキリ					○								
55 メボソムシクイ					○	○				○	○		
56 エゾムシクイ					○					○			
57 センダイムシクイ					○								
58 キクイタダキ												○	
59 キビタキ					○	○							
60 オオルリ					○								
61 コサメビタキ					○	○				○	○	○	
62 ハシブトガラ	○	○	○	○	○	○					○	○	○
63 ヒガラ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
64 ヤマガラ	○	○	○		○			○		○	○	○	
65 シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
66 ゴジュウカラ	○	○	○	○								○	○
67 メジロ				○	○								
68 ミヤマホオジロ				○								○	○
69 アオジ				○	○	○	○	○	○	○	○	○	
70 アトリ	○	○	○									○	○
71 カワラヒワ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
72 マヒワ													○
73 ベニヒワ													○
74 イスカ	○	○	○	○	○							○	○
75 ベニマシコ	○	○	○	○									○
76 ウソ				○									
77 シメ		○	○	○	○							○	○
78 スズメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
79 コムクドリ			○	○	○	○	○	○	○	○			
80 ムクドリ			○			○	○	○	○	○	○		
81 カケス	○		○	○								○	○
82 ハシホソガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
83 ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○



円山公園を歩きながら 自問自答

2002. 3. 3

富田寿一

今日は円山公園の探鳥会である。昨日の吹雪とうって変わって見事な晴天である。新雪がキラキラと眩しい。集まった人数20名、顔ぶれを見るとベテランさんばかりである。

「多分、なんにもいないでしょうね」、「カラ類くらいでしょうが」挨拶代わりの声が聞こえる。「そうかやっぱり珍しい鳥は望めないか〜」珍鳥好みの自分が不満の声を出す。するともう一人の自分が「いやいや珍しい鳥ばかりが鳥ではないよ。僕らの会も野鳥愛護会となってるし、珍鳥愛護会ではないよ。いつも目にしている鳥だってよく観ると可愛いし、新たな発見もある筈。あそこにいるスズメやカラス、そして樹木にとまっているドバトも観察すると興味がわいてくるものだよ」。すると珍鳥好みの自分が不満そうにまた反論を始める。「君はそう言うけど皆んな探鳥会では珍鳥や迷鳥の情報には目を輝かせるし、突然目の前に日頃見ることが出来ない鳥が現れた時の皆んなの興奮振りを何度も見てきたでしょ！この公園だって何年か前に“亜種ベニバラウソ”がつかいで来た時は多くの人が集まったし、珍鳥を見るために日本中や外国までもお金と時間をかけて出かける人も多いよ。それに珍鳥の中には絶滅寸前の種も多いんだ。自然環境の変化に過敏に反応し、ついていけないためなんだ。そんな種に興味を持って環境問題を考えることは必要と思うよ。」珍鳥好みのお喋りに熱が入ってきました。するともう一人の自分が静かに語り始めた。「そうだね、確かに君の言うことも理解出来るよ。日頃見ることが出来ない鳥を見て歓声をあげるのも正直な気持ちだし、無理して平静を装う必要もないしね。ただ、言えることはあくまでも程度の問題だと思うよ。珍鳥や迷鳥ばかりを追いかけて身近にいる多くの野鳥達が目に入らなくなるのはやはり行き過ぎと言えるかもね。今日、この円山に集まった人達は最初から特別な鳥を見る可能性は低いとわかっているがらやって来た筈だし、決して珍鳥マニアではなく、ただ鳥が好きな人達だと思うよ。何事もバランスが大切だと言うことかな?」、というところでもう終着点の公園管理事務所の前に着いてしまいました。

～陰の声～ 「おいおい君こそ、いったい何しに今日の探鳥会に来たのだね?」、「どうもすみません!」

〒061-1425 恵庭市文京町1-19-3

【記録された鳥】 マガモ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、カワラヒワ、ウソ、スズメ、ムクドリ、カケス、ハシブトガラス、ドバト 以上 17種

【参加者】 山形裕規、中正憲佑、山田甚一、戸津以知子、高栗 勇、後藤義民、松原寛直・敏子、白澤昌彦・留美子、志田博明、赤沼礼子、武沢和義、石田典也、板田孝弘、小堀煌治、三船幸子、富田寿一、成澤里美、高橋良直、蒲澤鉄太郎、井上公雄 以上 22名

【担当幹事】 富田寿一、武沢和義

ウトナイ湖探鳥会に参加してみて

2002. 3. 24 高橋 成人

新聞で探鳥会へ参加してみませんかと案内があり、自分の生活環境、特に週末の過ごし方に、多少の不安を感じながら、初参加「野幌森林公園」、2回目「ウトナイ湖」へ。野山、水辺の鳥を体験してみて、「鳥」の生活風習、又自然環境の中、生命維持の営みが循環されているのに驚くばかりでした。

私は「鳥」については、まったく知識が無く、双眼鏡からの鳥の形状、又は鳴き声等で、皆様方はエナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ等、鳥体形が小さく、身の動きが俊敏性を見事に判別され驚き、又フィールドスコープを高橋さん、道場さんのを覗きヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ホオジロガモ等、鳥体形模様色彩の特長で、潜水ガモの見分け方など教えて戴き、またまた、驚きの連続でした。やはり、「鳥」に接する機会を増すことが、判別できる様になり自信につながると考えます。又、



ウトナイ湖に木道やあずまやができました。

探鳥会を通して、環境保全を痛感致しました。今後共、宜しくお願い致します。

〒006-0002 札幌市手稲区宮の沢2条3丁目277-10

【記録された鳥】 カイツブリ、ダイサギ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、ヒドリガモ、ヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、カモメ、オオセグロカモメ、オオアカゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、オオジュリン、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト

以上 34種

【参加者】 赤沼礼子、荒木良一、石田典也、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、片山 實、蒲澤鉄太郎・則子、川東保憲・知子、川村宣子、川端正晴・満寿美・はるみ、栗林宏三、小山久一、後藤義民、島田芳郎・陽子、高橋良直、高橋成人、高栗 勇、田中哲郎、田宮ひろ子、戸田輝義、中正憲佑・弘子、成澤里美、樋口孝城、松原寛直・敏子、三船喜克・幸子、村上トヨ、山口和夫、山田良造、横山加奈子、柳川 巖、渡辺吉宗・好子、道場 優 以上 42名

【担当幹事】 道場 優、三船幸子

野幌森林公園探鳥会

2002. 4. 14

【記録された鳥】 カイツブリ、トビ、オオタカ、オシドリ、コガモ、マガモ、キジバト、アオバト、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、ルリビタキ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、カワラヒワ、シメ、カケス、ハシブトガラス

以上 30種

【参加者】 横田通典、斉藤正雄、瀬賀勝人、岸谷美恵子、品川睦生、小山久一、小西扶美枝、平賀節子、山田良造、戸津高保・以知子、松原寛直・敏子、中正憲佑・弘子、板田孝弘、吉田慶子、蒲澤鉄太郎・則子、今村三枝子、今泉秀吉、浪田良三、高橋良直、田子元樹、成澤里美、高嶋昭英・則子、山形裕規・麻里亜、赤沼礼子、荒木良一、島田芳郎・陽子、新保宏四・宏子、山口和夫、岩崎孝博、高栗勇、後藤義民、大野俊男、東澤 誠、荏部栄一、屋代育夫、井上公雄

以上 44名

【担当幹事】 後藤義民、田子元樹

宮島沼の観察会で考えた事

2002. 4. 21 尾 崎 脩

昨年、30年ぶりに札幌に戻りました。久方振りの札幌はすっかり日本の典型的な地方都市の様相を示しており、少なからずがっかりしている昨今です。

街の中は縦・横に行きかう車やデパートの駐車場に入ろうとする車で渋滞し、排気ガスに満ちています。街の周辺は山の際まで住宅が密集し、かつて沢道だった所も造成され、街をとり囲む緑がギリギリまで削られています。

以前は容易に見つけられた鳥も鳥観察素人の私には見つける事ができませんでした。そんな時、宮島沼で観察会がある事を知り、勇躍、参加した次第です。

宮島沼の対岸には薄紫に霞んだ山や、赤い三角屋根の家やビニールハウスらしき物が見え、平らで広がりのある北の大地の春を感じさせる景色でした。心が伸びやかになり、くつろいだ気分になる事ができました。

沼のすぐそばまで畑が迫っているのに多数の雁が休息しているのには驚きました。その雁が風が強くなるにつれて隣の耕作地に移動し、土の上で暖をとるのかのように眠っているのを見ました。とてもどかな風情でした。雁を追いたてない耕作者の心の広さ(?)に感心すると同時に、人間と雁とが共生している事を感じました。

耕作者と鳥とが共生し得るならば(両者とも不便さや損失を我慢している?)、街の中でも両者の共生が可能なはずと思いました。

街では人は自分の便利さや利益のみを考えて行動しています。その事は当然の事とみんなが思っています。その結果、車があふれ、円滑な交通すら出来ない街にしています。街の中を利用している人間誰もが多少の不便さや損失を甘受し、鳥さんが居られる場所を(居心地のよい場所でなくても)提供する心の広さを持てば、人間と鳥とが共生できる街を作りだすことができると思いました。

札幌を街の中で大型の鳥や小動物を観察できる街にして、日本の典型的な地方都市から世界の先端的な環境都市にしたいものだと、帰り道々考えていました。

〒062-0932 札幌市豊平区平岸2条8丁目5-48

【記録された鳥】 アオサギ、トビ、ノスリ、オオハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ハクガン、ヒドリガモ、コガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、カモメ、ノビタキ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、 以上 22種

【参加者】 赤沼礼子、今村三枝子、石田典也、井上公雄、

岩崎孝博、今泉秀吉、臼田 正、尾崎 脩、岡田幹夫、川東保憲・知子、長尾由美子、蒲澤鉄太郎・則子、岸谷美恵子、北山政人、小堀煌治、佐藤幸典、佐藤ひろみ、品川睦生、島田芳郎・陽子、白澤昌彦・留美子、高橋成人・富美江、田辺 至、戸津高保・以知子、登野泰信、成澤里美、西村、浜田 強、樋口孝城・陽子、広川淳子、松原寛直・敏子、柳川 巖、山形裕規・郷子・麻里亜、山田良造、吉田慶子

以上 44名

【担当幹事】佐藤幸典、佐藤ひろみ

藤の沢探鳥会に参加して

2002. 5. 3 山 川 美 香

満開の桜を見ながら鳥合せ、昼食。このままビールを飲んで青空を見上げながら、昼寝でもしたいノ気温20℃を越える好天気恵まれた。藤の沢(白鳥園)探鳥会。ここでの探鳥会に参加したのは、初めてのこと。オオルリ、キビタキを期待し歩きはじめるが、鳥の声はなかなか聞けず、いつものヒヨドリの声だけが響き渡る。足元には名前の知らない植物がたくさん。二年程前から、本を片手に名前を覚えはじめたが、冬を越すと忘れていた。はじめて見る植物(花)を詳しい方に教えていただくが、そばから忘れる。同じ事を繰り返し少しずつ鳥を覚えたように植物も、こうして覚えていくのだろう。今日の復習は、ハウチャクソウ、ユキザサ、オオアマドコロの違いを確認。まだまだ初心者です。身近にカラス・スズメ以外の鳥、たくさんの植物の名前を覚えるのが楽しくなってきました。時間があれば探鳥会には参加し続けたいと思っています。眼下に白鳥園周辺の桜を見下しながらの散策、途中、ダミ声のウグイスの声にびっくり(実はカケス)しながら藤の沢探鳥会でした。また、みなさんと一緒にさせて下さい。ありがとうございました。

〒069-0831 江別市野幌若葉町30-17

【記録された鳥】キジバト、ツツドリ、コゲラ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、トラツグミ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、ホオジロ、アオジ、クロジ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、シメ、スズメ、カケス、ハシブトガラス

以上 30種

【参加者】荒木良一、板田孝弘、今泉秀吉、犬飼 弘、井上公雄、岩崎孝博、岩田泰葉、岩田敦子、岩田好孝、尾崎脩、岡田幹夫、川東保憲・知子、蒲澤鉄太郎・則子、小堀煌治、後藤義民、荏部栄一、佐々木裕、島田芳郎・陽子、

島田満里子、品川睦生、高栗 勇、田中志司子、登野泰信、戸津高保・以知子、早坂泰夫、原 美保、樋口孝城・陽子、松原寛直・敏子、水上砂恵子、村田静穂、矢野玲子、山川美香、山口和夫、山田良造

以上 40名

【担当幹事】小堀煌治、井上公雄

野幌森林公園探鳥会

2002. 5. 5 小 松 信 子

野幌森林公園の探鳥会にはじめて参加しました。五月晴れの真っ青な空の下は、芽吹きはじめたみずみずしい木々が枝を広げています。足元はミヤマエンレイソウ、オオバナノエンレイソウ、ニリンソウ、ミドリニリンソウ、エゾエンゴサク、ザゼンソウ等、数え切れないほどの花々が咲き誇っています。耳を澄ますと小鳥の声が聞こえてきました。聞きなれたウグイスの声です。姿は見えませんでした。すぐそこに居るようなかん高い声です。一緒に居た方が「15分もここに居れば姿を近くで見れますよ。」と声をかけてくれました。

今度は目の前をアオジがチョコチョコと横切っていきました。感激していると次から次へと鳥が出現します。ニュウナイスズメ・キバシリ・カワラヒワ・ヤマガラ・ヒガラ…。でも私にはなかなか双眼鏡で見ることが出来ませんでした。「居る所が分かるのに双眼鏡で見れないの。」と友達に話していたら、近くに居た方が「まず鳥を見つけたら、鳥から目を離さないで、目の方へ双眼鏡を持っていくと良いですよ。」と教えてくださったので、早速、その通り行ったら、見ることが出来るようになりました。

はじめての野幌で沢山の鳥や植物に出会いましたが、最高の収穫は、私の双眼鏡では黒っぽくしか見えなかった幸福の青い鳥「オオルリ」を望遠鏡で見せていただき、本当に青く見えて幸せな気持ちになったことと、双眼鏡の使い方が分かったことです。チャンスがあったらまた参加したいと思います。

〒064-0808 札幌市中央区南8条西9丁目755-21

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、ハイタカ、オオジギ、キジバト、アオバト、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス

以上 29種

【参加者】板田孝弘、犬飼 弘、井上公雄、今村三枝子、岩崎孝博、内山正裕、大槻日出、大西典子、太田恵超、岡

田幹夫、鎌田玲子、蒲澤鉄太郎・則子、川村宜子、後藤義民、小林紀子、小松信子、近藤綾子、今野 弘、佐々木充人、志田博明・政子、島田芳郎・陽子、品川睦生、瀬賀勝人、高栗 勇、高野雅則、富川 徹、富永マサエ、戸津高保・以知子、中正憲佑・弘子、浪田良三、野坂英三、原美保、樋口孝城・陽子、藤原伸彦・和子、藤本千歳、辺見敦子、松原寛直、水上砂恵子、屋代育夫、山口和夫、吉田慶子

以上 48名

【担当幹事】後藤義民、岡田幹夫

千歳川周辺早朝探鳥会

2002. 5.12 荒 木 良 一

愛護会の年間スケジュールの中でも、個人的にはもっとも千歳川早朝探鳥会には関心がありました。私自身がこの出身ということもあって美笛川から支笏湖、そして千歳川の美しさ、魚の数の多さ、素晴らしい紅葉を見せてくれることなど知っていたつもりでした。

しかし、何度か訪れたこの場所では目立った野鳥に出会うこともなく、いつも途中で行き先を支笏湖や苫小牧に変更し、結局「今日も場所の選択を間違えた。」と悔やんだものです。ところが昨年「野鳥だより」を見ても、この「サケ・マスふ化場」付近の出現種は40種とあり、しかもその中にはバードウォッチャー垂涎的のヤマセミが含まれています。いままでカラ類やヒヨドリなどの留鳥しか見つけられなかったのは歩くコースが違ふと決めつけ、これは絶対に突き止めなければならないと思っていました。

野鳥撮影の師と仰ぐ(勝手に)山田良造さんが会の写真展に出しているものを含め、多くのヤマセミをここで撮っ

たと車の中で話され、秘密の場所があると確信しました。

小雨、朝の5時集合にもかかわらず、野鳥をやめられなくなった面々が歩きはじめた探鳥路は、いつもの路。ところが出るわ出るわ、オオルリなんかはアオジなみ。帰り道には「なんだ、オオルリか。」という声も。あきらめかけていたヤマセミも現れ(先頭を歩いていたグループのみ見ることができました)、「やっぱり、いい所だ。」と思うとともに、ここのガイドマップに資料提供している佐藤さんの見事なヤマセミの写真を見せてもらい、「この方々はもっともっと知っている。」秘密の場所への疑いをまだ捨てきれない新米の私でした。幹事のみなさん本当に有難うございました。

〒007-0808 札幌市東区東苗穂8丁目2-6-11

【記録された鳥】トビ、オシドリ、マガモ、キンクロハジロ、オオジシギ、キジバト、ツツドリ、ヤマセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ニュウナイスズメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上 39種

【参加者】川東保憲・知子、吉田慶子、岩崎孝博、大荒田忠良、屋代育夫、佐藤幸典、荏部栄一、木村与吉、道場優・信子、高橋良直、島田芳郎・陽子、栗林宏三、松原寛直・敏子、橋爪陽子、荒木良一、長尾由美子、逸見トモ子、戸津高保、蒲澤鉄太郎・則子、品川睦生、山口和夫、山田良造、高橋利道、出口政治

以上 29名

【担当幹事】岩崎孝博、戸津高保

鳥 民 だ よ り

◆大館和広氏特別展のご案内

「コムケ湖の野鳥」

日 時：平成14年8月3日(土)～8月18日(日)

10:00～17:00(月曜日は休み)

場 所：紋別市立博物館

紋別市幸町3丁目1-4

☎ 01582-3-4236

内 容：コムケ湖の野鳥はどこから来てどこへ行くか。写真などを用いてわかりやすく展示します。

◆コムケ湖・能取湖一泊探鳥会のご案内

今年の新年講演会で、コムケ湖のシギ・チドリについて紋別の大館和広さんの講演が大変好評でした。会員のみなさんから、一泊探鳥会はコムケ湖へ是非との声が多くありましたので、今年は下記の通り、コムケ湖・能取湖と計画しました。

このころ能取湖のサング草もそろそろ色がつき、見頃となるでしょう。みなさん、お誘いあわせてご参加下さい。

日 時：8月31日(土)・9月1日(日)

集合場所：札幌市中央区大通り NHK前

集合時刻：8月31日 午前6時30分

宿 泊：能取湖畔 能取湖荘

札幌帰着：9月1日 午後6時予定
定 員：45名(先着順)
会 費：16,000円(当日申し受けます)
申込み先：蒲澤宅 ☎011-663-9783
札幌帰着：9月1日 午後6時予定
7月3日 午前9時から受付
そ の 他：当日の昼食は持参して下さい。



【福 移】

2002年7月7日(日)

殆どの鳥の繁殖のシーズンも終
息の時期に入り、巣立って間もな
い幼鳥も、一人立ちに向って健気
な姿を見せています。此処、福移

の牧草地・堤防河川敷地での探鳥会は、真夏に向って今年
前半の山野、草原性の鳥の観察に一区切りになる会になり
ます。

めっきり少なくなった草原性のシマアオジ。カッコウ、
オオジュリン、ノビタキ、ベニマシコ、オオヨシキリ、コ
ヨシキリ、モズ、アリスイ、石狩川岸の土手にコロニーを
営むショウドウツバメや、イワツバメ、カワセミ、ノゴマ、
牧草の刈り取り跡ではウズラなどが記録されています。

集 合＝8時40分 市営バス福移入口停留所付近
交 通＝地下鉄東豊線環状通車駅より、市営バス北札幌
線福移入口下車

【コムケ湖・能取湖】

別 掲

【鵲 川】

2002年8月18日(日)、9月8日(日)

この時期には、もうすでにシベリア北東部の高緯度の地
で繁殖を終え、越冬のため南へ渡りは始めているコチドリ、
メダイチドリ、ダイゼン、チュウシャクシギ、キアシシギ
などのシギ・チドリ類が、この鵲川の河口でも羽を休めて
います。近年、河口付近の海岸線の浸食が進み、干潟や湿
地が減少し、シギ・チドリ類の渡来数も減少傾向にありま
すが、チュウヒやオオタカも度々現れ、冬羽に衣替えした
ノビタキ、オオジュリン、時にはアジサシ、カワセミが見
られることもあります。

集 合＝JR日高線鵲川駅前 午前9時30分

【野幌森林公園を歩きましょう】

2002年7月14日(日)、9月15日(日)

集 合＝大沢口駐車場入口 午前9時

交 通＝夕鉄バス(文京台線)

新札幌駅バスターミナル発「文京台西行き」

大沢口公園下車 徒歩5分

☆観察用具、図鑑筆記具、昼食雨具などをご持参下さい。

☆交通機関をご利用の方は、各自でお確かめ下さい。

☆いずれの探鳥会も、余程の悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせは、

011-563-5158 白澤宅へ

◆ 写真出展品目録 ◆

佐伯 武美	「シジュウカラ、カワラヒワ」
佐藤ひろみ	「コミミズク、シマアオジ」
川上 秀幸	「シメ、タンチョウ」
荒木 良一	「エナガ」
渋谷 信六	「ジョウビタキ、カワガラス」
新城 久	「ケアシノスリ、マガン・ハクガン」
志田 博明	「コムクドリ、アカハラ」
田向 一彦	「キビタキ、メジロ」
後藤 義民	「ベニヒワ(2点)」
遠藤 義浩	「ハヤブサ、アマサギ」
佐藤 幸典	「ハクガン(2点)」
小堀 煌治	「カワアイサ、コウライアイサ」
高橋 良直	「オオハム、ホウロクシギ」
山田 良造	「ヤマセミ、アカエリヒレアシシギ」
森田 崇司	「シロカモメ(2点)」

☆☆☆ 会 員 名 簿 ☆☆☆

【新しく会員になられた方】

高橋 成人	〒006-0002 札幌市手稲区西宮の沢2条3丁目277-10
清水 純	〒068-0048 岩見沢市西川町503-146
藤本 千歳	〒065-0010 札幌市東区北10条東12丁目4-20 ロイヤルシャトー光星403
栗原 哲	〒005-0004 札幌市南区澄川4-11-5-13
荻部 栄一	〒004-0866 札幌市清田区北野6条1-4-37-2B
藤川 洋子	〒062-0053 札幌市豊平区月寒3条16丁目4-1-601
尾崎 脩	〒062-0932 札幌市豊平区平岸2条8丁目5-48
山崎あずさ	〒002-8025 札幌市北区篠路5条6丁目6-8

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>